

かみぐみいせき

# 上組遺跡発掘調査

## 現地説明会資料



2010年9月12日

(財)浜松市文化振興財団・浜松市文化財課

はじめに

上組遺跡は、南区渡瀬町に位置し、遺跡の範囲内で宅地造成に伴う開発が行われるため、2010年7月26日から発掘調査を実施しました。上組遺跡の調査は、渡瀬町で初めての本格的な発掘調査になります。調査は現在も継続中ですが、これまでの調査成果の一端を見ていただければと思います。

今回の調査では、主に奈良時代(約1300年前)や鎌倉時代(約800年前)の遺構や遺物が多く見つかったため、調査地内には奈良時代や鎌倉時代の集落が広がっていることが明らかになりました。また、鎌倉時代の中国産陶磁器が出土したことから、有力者の存在がうかがえます。渡瀬町は蒲御厨と呼ばれる伊勢神宮の荘園内であったと考えられるため、荘園を管理していた階層の屋敷が上組遺跡にあった可能性が考えられます。

### 調査の成果

上組遺跡の調査では小穴や土坑、溝跡、井戸跡などの生活の痕跡が見つかり、奈良時代や鎌倉時代の集落の状況が明らかになりました。

今回の調査で奈良時代の遺構は、井戸跡と土坑を検出しました。土坑からは土師器と須恵器が出土しました。奈良時代の遺構は少ないですが、出土している奈良時代の遺物は比較的多く、残りも良いことから、鎌倉時代以降の開発により壊されてしまった可能性が考えられます。

鎌倉時代の遺構は、小穴や土坑、溝跡、井戸跡などが見つかりました。そのなかで注目されるのは、調査区内で多く見つかっている溝跡です。検出した多くの溝跡は東西や南北に軸が向いており、土地を区画するような使われ方をしていたと考えられます。特に調査区の西端と東端で検



土坑から出土した奈良時代の遺物

出した溝跡は、幅が広く掘り込みも深いことから水路や用水路のような使われ方も想定できます。さらに、調査区内で出土した遺物からは、鎌倉時代の有力者の存在がうかがえるため、屋敷地を区画する溝の可能性も高いと考えられます。

上組遺跡で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗・かわらけ・中国産陶磁器などがありますが、出土した遺物の多くは奈良時代や鎌倉時代のものです。

弥生土器は1点だけ出土しましたが、遺構が確認できないことから、弥生時代の集落は調査区内には広がっていないと考えられます。しかし、上組遺跡から東側に少し離れた所に位置する飯田遺跡群では、弥生時代の集落跡が見つかっており、上組遺跡の周辺にも弥生時代の集落が広がっていた可能性が考えられます。同じく古墳時代の遺物も非常に少なく、集落は今回の調査区から離れた位置に広がることが想定されます。



出土した弥生土器

その他に，上組遺跡で出土した遺物で注目されるのは，奈良時代の陶馬と鎌倉時代の遺物です。

出土した陶馬はほぼ完全な形をしており，浜松市内で出土している陶馬の中では最大のもの(全長約20cm)になります。さらに，顔や鞍などが写実的に表現されており，奈良時代の初め頃の特徴を持っています。陶馬の用途については，一般的に遺跡で出土する陶馬は足が破損していることが多いことから，祭祀の時に実物の馬を犠牲にする代わりとして使用されたと考えられています。



出土した陶馬

鎌倉時代の遺物では，山茶碗と呼ばれる陶質の焼き物が最も多く出土しています。その中には底部に墨書をしたものも見られます。また，宴会などの際に使用された「かわらけ」と呼ばれる素焼の土器皿や中国産の陶磁器が出土したことから，有力者の屋敷があったと考えられます。特に中国産陶磁器は当時の高級食器であり，簡単に手に入れられるものではなく，さらに天目茶碗や青白磁合子などのめずらしい遺物もあることから，階層性の高さもうかがえます。



鎌倉時代の遺物



出土した中国産陶磁器



墨書された山茶碗

### 上組遺跡の性格

上組遺跡では，調査によって鎌倉時代の有力者の屋敷地があったことが明らかになりました。現在の浜松市東部の蒲地区，飯田地区，和田地区などは「蒲御厨(かばのみくりや)」と呼ばれる平安時代に成立した伊勢神宮の荘園であるため，その管理を任されていた階層と関係する人物が住んでいたと考えられます。特に調査地の南側には，蒲御厨の公文(くもん)であった渡瀬氏の居館推定地があり，渡瀬氏と関係する人物が上組遺跡に住んでいた可能性が高いと考えられます。



